## エッセイ「ヴィクトリア朝文化研究の〈場所〉|

## ヴィクトリア朝文化研究の一指針

中島 俊郎

文系の学問は役に立たないから廃止してしまえ、と脅迫まがいの言葉を 四方八方からぶつけられて、文系の教員はとまどってしまった。いよいよ 黙示録の日が到来したかという諦めがつのるだけで大学内外からはしかる べき指針もなく、そのあげく成果が曖昧模糊とした学問は教育の名に値す るのか、と非難が繰り返され甘んじるしかない日々が続いた。学生からも 「イギリス文化史は就職にどれくらい役に立つのですか?」と真顔で詰問 され思わず絶句してしまい、まさに前門の虎、後門の狼といった状態であ る。

こうした現状下で、アリストテレスは知性の追究そのものを尊しとし、それ自体の自足したあり方を「スコレー」と表現しているが、スクールの原義はここにあるのだ、などと学問の大義から説明しようとしても誰も耳を傾けてくれない。そして大学教育の根幹をリベラル・アーツが占めルネサンス期に人間追究がなされ、19世紀初頭にヒューマニティーズへと発展していき、その中に文学、文化研究は含まれているのだ、などと文系こそ学問の王道であるのだと力説してみたところで、「沈滞した」とみなされている現状を打破するにはまったくもって蟷螂の斧でしかなかった。

では、この閉塞した状況を打開するにはどうすればいいのか。文化研究の現場を直視し、どのように発展していったかという歴史的展開を具体的に考えてみることでいくばくかの示唆がえられるのではないか、と思える。本学会の会員の多くが文系に類した機関に所属していると思われるので、ヴィクトリア朝末に生じた英文学研究の黎明期に研究がどのような状態にあったかといった問題を、ひとりの文学研究者を介在させて検討して

みよう。

少なからぬ驚きだが、問題の在り処は過去も現在も何ら変わらない。文学を教える現場では即座にいかに教授するかという困難に直面した。文学という、紙のうえに印刷された想像力の展開をいかにして教えるのか、という点にこそ文学教育が内在する本質的な難しさがあった。どんな工夫をこらしても想像力の躍動を停止せずに教えることは至難をきわめた。文学という鳥を籠のなかに閉じ込めてしまい観察するようなアプローチは、文学の形骸化した姿しかとどめなかった。想像力を試験するとはどういうことなのか。英文学が試験というなかで制度化されたときに、何が起きたのか。

1855年、植民地インドにおいて、またその後すぐにイギリス本国においても公務員採用試験に英文学が教科として導入された。1871年に行われたインドでの公務員採用試験では数学1,250点、自然科学1,000点満点に対して、英文学は500点満点であった。どのような出題であったのであろうか。シェイクスピア、ミルトン、ポープなどの古典作家からスコット、テニソンといった現代作家までの諸作品より40から50もの文章を選び出し、設問として「以下の文章を読んで出典を記し、英語としての特徴的な点を詳述せよ」というような質問が課された。50問中、10問くらい正解すれば十分に合格圏内であったが、45問も正解して試験官を驚かせた志願者がいたという。

今日でもイギリス文学史の試験問題として出題されているような試験だが、こうした試験の傾向と対策として、1860年代には『標準受験英文学』、『公務員採用試験対策英文学』などと銘打った受験参考書が300点以上も出版されていたのである。当然、同じような解答ばかりが並ぶ答案用紙が量産されるようになった。こうした詰込み主義に対して教育者側は手をこまねいていたのだが、学校で英文学を教えることに熱意を少しばかり向け出すようになった。ただ困ったことに教授法は従来のラテン語を教えるのと全く同じような手法が用いられたのである。たとえば、ミルトンの詩句を選んで文法、解釈をほどこすのだが、ミルトンの作品が選ばれたのは、「高いモラルを含んで」いるからであって、決して文学性ゆえではなかったのである。こうした優れていると見なされた特定の作家の文章をもとに、

暗誦、作文が課されたのであった。なぜこのような言語表現をとるのか、といった文学的な側面は一切無視されてしまい、たえず字義にとらわれ文学を解体してしまう教育法が採られた結果、つまりカーライルが論難した、「言語学という堆肥に根を広げた」野菜のごとく文学をみなしてしまったため、英文学教育が目標とした「人格、人間性の涵養」などとはほど遠い無残な帰結をむかえてしまったのであった。

またトマス・アーノルド自身は文学のもつ人文的側面を重視していたにもかかわらず、パブリック・スクールの現場では知性、想像力の啓発よりも、信仰、身体の酷使、道徳面での潔癖性が強調されたため(たとえば『トム・ブラウンの学校生活』で、父が息子を寄宿舎へ送りだすとき、「正直なイギリス人、立派なジェントルマン、信仰の篤いキリスト教徒になって欲しい」と忠言をおくり、学業面に一切ふれていないことを思い起こせば十分であろう)、文学教育は同様な病弊をかくせなかったのである。

こうした硬直した英文学研究の現状をまえにして、「英文学研究は有望な科目で時間も精力も費やされ、注目されているというのに期待された成果は一向に上がっていない。知識が伝えられず、興味をよびさましてもいない現状を教師は感じている」とつつみかくさず吐露した批評家がいた。ジョン・チャートン・コリンズ(1848-1908)である。コリンズと言えば、エドマンド・ゴスの著作を完膚なきまでにこき下ろし、オックスフォード大学教授職に就任するためには手段を選ばないといった悪名の高さばかりが喧伝されてきた。テニソンからは「文学という頭髪に巣くうシラミ」というありがたくない仇名をつけられたりもした。

桂冠詩人から不名誉な称号を奉られてから一世紀以上たった現在、コリンズがテニソンの詩文に下した多くの注釈は、テニソン詩への標準的な解説書になっているクリストファー・リックスの編纂書『テニソンの詩作品』(1969)に多くが採用されている。テニソンの詩句の出典だけにとどめておけばコリンズは難を免れたであろうが、剽窃まがいの評語を弄してしまったがために詩人の逆鱗にふれてしまったのである。今日、公平な目でレズリー・スティーヴンが編集していた『コーンヒル・マガジン』に連載されていたこの注釈作業を検討してみると、つまり周辺で生起していた騒動を一掃すれば、コリンズの正当性があらわになり、逆にテニソンがかくま

でも怒りを爆発させたのも意外と核心をついていたからではあるまいかと 思えてくるのである。

さて成人教育運動 (The University Extension Movement) は、1873 年にケンブリッジ、オックスフォードには1878年に、そして1876年、ロンドンにそれぞれセンターが設置され開始をみた。そして1890-91年、成人教育運動は興隆をきわめ、コース数はオックスフォードで102、ケンブリッジでは135、ロンドンでは130も開講され、20,248名(オックスフォード)、10,947名(ケンブリッジ)、12,923名(ロンドン)もの受講者を獲得していた。

こうした展開のなかでもっとも人気を集めたのが英文学であった。他の 教科と比べて、それは準備もそれほど必要なく、人生と直結し、資格試験 などにも対応していて、何よりも愛国心を鼓舞したからである。そして この英文学の教え手でもっとも注目を集めたのがコリンズであった。「聴 講者は集中して耳を傾け、コース修了までほとんど脱落者もなく申し分な い」とコリンズが受講者を賞賛すれば、受講者の方からも、「朗々とした声 で、文学の本質をじつに分りやすく教えてくれるすばらしい講師だ」と賛 辞を寄せる声があとをたたなかった。

コリンズが成人教育のために作成したシラバスを見るとよく練られていて、英文学を志す者の興味をつなぐように工夫されている。そして、受講者の少なくないコリンズ讃の声からは、コリンズがすぐれた文学の教え手であったことが判明する。実際、受講者数は、教え方の巧拙によって著しく増減した。とかく高名な作家や大学人は名声倒れで、意外に教える方は稚拙であり、受講者からは評判が悪かったようだ。やはり教育は教えるテーマを熟考し、教える熱意をもち、同時に創意工夫を凝らし、挑むしかないようである。

コリンズの教育理念が帰結点を見出すのは、1904年、バーミンガム大学の英文学教授に任命されてからである。大学おける専任職を得たとはいえ、コリンズは何ら変わることなく大学外で、つまり成人教育のために英文学を逝去するまで教えつづけた。1904年以後もおしなべて10コース以外の授業を各学期に担当している。こうしたコリンズの態度は大学内で専門科目として英文学を教える以上に、英文学を広く人々に教え、その魅力

を直接伝えるところに歓びを見出していたからであろう。成人教育を自身の野心実現のために利用した事実はたしかに否めないものがあろう。だが、二度にわたり、オックスフォード大学から拒絶されても、またバーミンガム大学で職を得ても、成人教育の講師をやめようとしなかったのは、やはり人々に英文学を教えることである種の自己実現をはかっていたと見る方が妥当であろう。

コリンズが世に強く訴えた最後のプロジェクトは、ジャーナリズム学科の設立であった。雑誌 The Nineteenth Century にその概要が詳しくコリンズ本人によって説明されているが、ここでもコリンズの成人教育に対する姿勢と同質のものを認めることができるのである。つまりそれは、大学教育と一般社会をたえず連動させて両者を活性化させようとする態度にほかならない。

オックスフォード大学生涯教育センターの資料保存室にはヴィクトリア 朝後期から展開した成人教育に関する膨大な資料が収蔵されている。受講 者が提出した課題レポートに添削者によるペンの書き込みが生々しく残っ ている。教育の現場がここにある。文化研究において新しい知見をえるた めには、従来の評価をつねに懐疑の目をもっていどみ、原資料に対して予 断を捨て対象を再考し、文化がかもしだす肌理をみずから感知していくし かないようだ。

——甲南大学教授